なんたん戦国巡り

京都府の中央部にある南丹市は古くから「丹波」と呼ばれており、織田信長から派遣された明智光秀が、当時の都である京都から丹波に侵攻して織田信長の勢力下に置きました。こうした丹波の各地では合戦の記録や伝承、そして、当時の権力者が拠点とした山城跡などが残されています。南丹市内の戦国時代ゆかりの地巡りをお楽しみください。

© 藤井尚夫

八木町

八木城の石垣

本丸付近には石垣が見られ、丹波三大山城に数えられる八木城の姿を感じることができます。

八木城赤色図

実戦に備えて、人為的に山が改変され、平坦地などが作られていることがわかります。

八木城が築かれた城山

国道9号からJR嵯峨野線を越えたあたりに城山がそびえています。京都縦貫自動車道の高架をくぐり八木城跡への登山道を歩むと、山頂付近には八木城が存在したことを示す石垣や曲輪、堀切などが今でも数多く残り、当時の面影をみることができます。現在、本丸跡は展望広場として整備され、南丹市八木町から亀山城跡のある亀岡市、さらには愛宕山まで見渡せる登山者の憩いの場所となっています。

八木城

戦国時代には各地で山城が造られました。八木城は丹波国守護代内藤氏の居城として、標高330mの城山の山頂から放射状に広がるように曲輪が配置されており、丹波から京都に向かう京街道を眼下に望みます。丹波国内では波多野氏が居城とした八上城、赤井（荻野）氏の黒井城と並んで、丹波三大城郭の一つに数えられるなど、丹波における重要拠点の一つでした。

この八木城を拠点として丹波支配に乗り出した内藤宗勝は船井郡・桑田郡（亀岡市・南丹市・京丹波町）を中心に丹波国内の反三好勢力の追討に力を注いでいきます。天田郡（福知山市）や八上城のある多紀郡（兵庫県丹波篠山市）、黒井城のある氷上郡（兵庫県丹波市）も影響下に置き、一時は「丹州太守」と称されるほど、丹波で力を持ちました。しかし、若狭国（福井県）への出兵が敗北に終わり、さらに永禄8年（1565年）天田郡へ勢力を拡大しつつあった荻野氏を攻めるため出陣しましたが、黒井城の攻撃中に討ち死にしてしまいます。これにより宗勝に従っていた八上城の波多野氏などは独立し、宗勝が築いてきた丹波支配はあえなく瓦解してしまいます。

しかしながらその後も内藤氏は一定の勢力を保持していましたが、室町幕府が滅亡したのち、八木城は信長の攻撃対象になり、光秀に攻められ、八木城落城とともに内藤氏も没落したと伝えられています。

周辺の関連史跡等

龍興寺

室町時代に細川勝元によって創建されたと伝わっていますが、光秀の丹波攻略により建物の多くが消失し、現在の姿は再建されたものです。

東雲寺

龍興寺の塔頭寺のひとつで、敷地は八木城主内藤家の居館跡といわれています。

観光スポット！

桜の名所である大堰川河川敷と八木町のシンボル「大堰橋」や昭和のまま時が止まったような「旧村役場神吉地区自治振興会館」もおすすめ！！

詳しくは、「**なんたんSCENE**」QRコード（裏表紙）からチェック！

コラム

八木城は丹波守護代内藤氏の居城であり、ここは戦国期の丹波国の中心地であった。後にこの地を掌握した明智光秀は、丹波の押さえとしてこの城を大改修し利用している。復元画（表紙）は明智時代の八木城を西方から見たものである。主郭からは眼下に亀山盆地がひろがり東方は京都の東山まで見渡せる。主郭部周辺は、丹波に新時代が来たことを象徴する石垣造りの近世山城に改修された姿を描いた。

現地を踏査すると、内藤氏の時代の八木城は、明智光秀が改修した城よりもさらに大規模であったらしく、主郭から離れた尾根先や峰続きにも、古い時代のものと考えられる遺構を見ることができる。

城の西方尾根上の「烏岳曲輪」の外辺にある石垣造りにされた巨大掘切は、在地衆の反撃に備えたと考えられる遺構であり、復元画では烏岳曲輪を俯瞰して掘切をとらえ、戦国の緊張感に包まれた八木城を表現した。

〈藤井尚夫　略歴〉
工業デザイナー。表紙「八木城俯瞰図」を作成。城郭復元図や縄張り図を専門誌で多数発表。著書に「復元イラスト中世の城と合戦」「フィールドワーク関ヶ原合戦」「ドキュメント信長の合戦」ほか。

詳しい観光情報は

八木町観光協会／☎0771-42-5850／月・水・金（祝日を除く）9時から12時

八木町観光協会　検索

内藤ジョアン

八木城から見下ろす旧城下町（現在の南丹市八木町）

丹波守護代内藤宗勝の跡を継いだ内藤貞弘は宗勝の子で、洗礼名をジョアン（如安）といいます。その名が示すとおりキリシタンで、父宗勝の死後、丹波各地を転戦していましたが、八木城に近い荘園も失うなど、その勢力は窮地に立たされていました。

永禄11年（1568年）織田信長と足利義昭が上洛してから、状況は変化していきます。内藤ジョアンは織田信長と緊密な関係を結ぶことで、丹波における失地回復に取り組んでいき、広域にわたる権力基盤を再興していきました。しかし、信長と義昭の不和が表面化することで、ジョアンの立場もあやしくなっていきます。そして信長と義昭が対立し、義昭が二条城に立てこもるに至って、ジョアンは義昭の許に兵を率いて参陣しています。1573年4月20日付けのイエズス会宣教師の報告によると、以下のように描写されています。『丹波のジョアン・内藤殿が十分に武装した兵二千名を伴ってこの都にきた。彼の旗はことごとく十字架のそれであり、兜の上には大きなイエズス会の金文字を付していた。彼は騎馬兵四百名と歩兵千六百名を率いて公方様のもとに向かった。』とあります。

こうしたなか、元亀4年（1573年）には足利義昭が織田信長によって京都から追放され、室町幕府が滅亡します。内藤ジョアンは丹波へ戻り八木城下の船井郡周辺を統治していたものと思われ、天正2年（1574年）にはルイス・フロイスやロレンソ修道士と面会しています。

天正3年（1575年）3月、織田信長は丹波の船井郡・桑田郡両郡の国衆を細川藤孝が統率するよう命令を発しました。これは内藤氏の権力基盤を揺るがす事態で、そして同年6月には、内藤氏は宇津氏と共に織田信長の攻撃対象になり、明智光秀が派遣され、丹波攻略が開始されることになります。明智光秀と八木城との戦いの記録は残されておらず、地元の伝承によると天正7年（1579年）に落城したと伝えられますが、定かではありません。現在のところ丹波攻略が始まった早い段階で八木城は落城していると思われ、内藤ジョアンは八木城では討ち死にせずに、毛利領の鞆(広島県福山市）にいる足利義昭の許に身を寄せていることが天正9年（1581年）の宣教師の資料から確認できます。この後、豊臣秀吉の家臣であり同じキリシタンであった小西行長に仕え、文禄の役の停戦協定のために明に派遣されるなど丹波国外で活躍します。キリシタンへの風当たりが強まるなか、ジョアンはその後も信仰をを捨てず、慶長19年（1614年）キリシタン禁教令により、高山右近と共にフィリピンのマニラに追放され、その地で没しました。

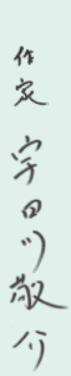
ジョアン顕彰碑

コラム

古代出雲と京を結ぶ山陰道の入口が丹波国であった。応仁の乱の東軍の大将細川勝元が丹波国を治めた中心の地で、龍興寺を建立したのが南丹市八木である。

その後丹波国の中心として、守護代の内藤家が八木の地を治め、日本海の魚を運ぶ鯖街道や京の裏街道周山街道など、都に山海の品を運ぶ往来の拠点となって繁栄を極めた。その繁栄は、フロイスが山陰のキリスト教布教の中心としたほどであった。

信長と対立をした将軍足利義昭は、豊かで文化的にも栄えた八木城の内藤如安に支援を求めた。信長は悪右衛門といわれた赤井（荻野）と八木城の内藤の討滅と丹波統一を明智光秀に命じた。しかし、キリスト教を敵にした光秀は信長の不興を買い、本能寺の変の遠因の一つとなる。しかしこれらの記録は明智光秀とキリスト教禁教の影響ですべて破棄されてしまっている。江戸時代には、秀吉の母の縁戚である小出氏が日本最後の城郭である園部城を築き、明治までこの地を治めた。



〈宇田川敬介 略歴〉
作家。丹波平定から本能寺の変に至る光秀の波乱の人生を描いた「時を継ぐ者伝 光秀 京へ」を執筆。そのほか「庄内藩幕末秘話」「日本文化の歳時記」など著書多数。

園部町

宍人館と城跡がある胎金寺山　©畠中和久

宍人館と宍人城

城主の小畠氏は、宍人を拠点に丹波守護細川家に仕えてきましたが、織田信長の丹波攻略に際しては明智光秀の家臣として活躍しました。

豊臣秀吉が天下統一を果たした後も宍人を中心に土地を与えられ、徳川家康が天下を掌握した後もこの地域の有力者でした。元和5年（1619年）に船井郡一帯を与えられた小出吉親は当初、宍人に居城を築くことも考えましたが、最終的には園部に拠点を置くことになり、園部陣屋が完成するまでの間、小畠氏のいる宍人館の北側に仮の館（小出館）を建てて、ここに2年間、滞在しました。

小畠氏居館である宍人館跡は現在広大な館の遺構が残されており、その北側には小出氏が臨時に入った仮の館跡の遺構もみられます。

※注意事項：ご見学を希望される場合は下記までお問合せください。
問合せ先：宍人区　小林様　E-MAIL　koba276489@yahoo.co.jp

小出館の虎口

©畠中和久

周辺の関連史跡等

蟠根寺城

城主は蜷川氏で、一族には室町幕府の政所代を代々世襲した新右衛門を名乗る一族がいます。織田信長が進める丹波攻略の際には明智光秀に従い、天下分け目の山崎の合戦には光秀方として従軍し、一族郎党戦死したと伝わります。城の東にある蟠根寺には、初代の蜷川親朝の木造が伝わっており、麓の春日神社は蟠根寺の守護神とされ、本殿は国の重要文化財に指定されています。

埴生城（写真は最福寺の山門）

城主は野々口氏で、野々口西蔵坊の時に明智光秀に従ったと伝えられ、光秀の丹波攻略や統治に積極的に関わっています。西蔵坊は本能寺の変にも光秀方として従軍しており、家臣の本城惣右衛門がこの時の記録を残しています。山崎の合戦に西蔵坊が従軍したかどうかはわかりませんが、光秀滅亡後も丹波に在住しており、豊臣秀吉の代官としての地位を確保しています。

城跡は単純な構造ですが、石垣が用いられている点が注目されます。

最福寺の門は埴生城から移築されたと伝わります。

園部城跡

明治2年（1869年）に築城された日本で一番最後の城。園部城の敷地や建物は官有地や民間への払い下げなど、多くは取り壊されてしまい、現在は京都府立園部高等学校及び附属中学校の校地。櫓門・番所・巽櫓が校門として利用され現存しています。

また、南丹市八木町の安楽寺には園部城から移築されたと伝えられる太鼓櫓があります。

南八田の五輪塔

丹波を西へ進む明智光秀と八上城から出撃した波多野秀治とが西本梅の八田川で合戦を行ったと伝わります。この戦いにより川が赤く染まったといわれています。現在もその地で亡くなった人を供養するための五輪塔が残されています。

観光スポット！

「道の駅京都新光悦村」で地元の特産品、グランピングが大人気の「るり渓温泉」もおすすめ！！

詳しくは「**なんたんSCENE**」QRコード（裏表紙）からチェック！

詳しい観光情報は

南丹市観光交流室／☎0771-68-0050　るり渓観光協会／☎0771-65-0209

南丹市役所　検索

日吉町

塩貝城跡全景　©畠中和久

塩貝城

内藤宗勝が赤井氏との戦いに備えて整えられた城と考えられており、丹波守護代内藤氏にとっては敵との最前線に位置しています。

地元の伝承によると城主は塩貝氏と伝わり、晴政・晴道・晴基と3代にわたり城主を務め、明智光秀との戦いで落城したと伝えられています。

城は主郭の曲輪とは別に北側の尾根には鍛冶屋敷と呼ばれる曲輪が設けられています。南丹市の史跡に指定されている城跡からは、胡麻の集落が一望できます。

また、日吉地区は東に宇津城（京都市京北地区）の宇津勢力と西には赤井氏の勢力下にあった周知城（京丹波町須知）をはじめとした赤井勢力に挟まれた不安定な地域であったと考えられています。丹波守護代内藤宗勝にとっては田原地域の有力者であった小林氏を味方にすることで反三好勢力に対抗しようとしていたと考えられます。小林氏は田原城を居城としており、田原地区を一望できる高室山に築かれたことから高室城とも呼ばれます。

塩貝城切岸　©畠中和久

※注意事項：ご見学を希望される場合は下記までお問合せください。
問合せ先：南丹市集落支援員　浅田　☎0771-68-0108

周辺の関連史跡等

賀善寺と徴発を免れた柱

丹波には明智光秀によって落城したと伝えられる山城以外にも光秀の痕跡があちこちに残されています。中世木にある賀善寺には周山城を築城する際に、本堂の柱を徴発するため印をつけましたが、寸法が足りず徴発を免れました。その柱が本堂に現存しています。

梅若屋敷跡及び墓所

能楽の名家である梅若家は、梅若家37世の梅若太夫波多景久が、御土御門天皇より若の字を賜り、梅津から梅若に改姓しました。戦国時代には梅若家は織田信長に仕え、殿田に梅若家の菩提寺である曹源寺も創建されました。

本能寺の変では光秀につき、一時は没落しましたが、細川幽斎の推挙によって徳川家康に仕え中興しました。

観光スポット！

日吉地域には都会の喧騒を忘れて温泉、BBQ、キャンプ、コテージでの宿泊楽しめる〝温泉総選挙2019〟2部門受賞の「道の駅スプリングスひよし」や「ひよしフォレストリゾート山の家」。さらに、世界的ピアニストのコンサートが楽しめる「かやぶき音楽堂」も見逃せない！

詳しくは「**なんたんSCENE**」QRコード（裏表紙）からチェック！

普門院（牧山の松明）

普門院の建物は明智光秀が周山城の築城のため徴発により取り壊されたと伝えられます。現在の建物はその後、再建されたものです。毎年8月24日に開催される「牧山の松明行事」は京都府の無形登録文化財に指定されています。

詳しい観光情報は

日吉町観光協会／☎ 0771-72-0196／水・日曜休み

日吉町観光協会　検索

美山町

今宮城

今宮城連続堀切　©畠中和久

美山町の北西部を本拠地にしていた川勝氏は、由良川の支流である棚野川に沿って殿城、今宮城、島城などを築いています。川勝氏は広継（光照）の時に13代将軍足利義輝に仕え、光照の子である継氏は織田信長に従い、明智光秀の丹波侵攻に協力しました。光照の孫である秀氏は光秀の六女を妻としていたと伝えられますが、本能寺の変の後、豊臣秀吉に仕え、関ヶ原の合戦の戦後処理では改易をまぬがれ幕臣・旗本になり兵庫県丹波市春日町などに領地を与えられました。

今宮城は川勝氏の居城で、丘陵上に堀切を多数設けるなど厳重に防御されている状況が確認できます。

※注意事項：入山届が必要です。（今宮区公民館横に備付）
問合せ先：今宮区　山崎様　☎090-7357-6869

今宮城全景　©畠中和久

島城は由良川と棚野川の合流する東側の丘陵頂部の上司集落から今宮集落まで広範囲が見渡せる場所に位置しています。美山地域で最大の規模を持ち、畝状竪堀と土塁の組み合わせられた防御施設は、戦国時代後半まで使用されていました。

城主は今宮城と同じく川勝氏による築城とされており、今宮城と合わせて、若狭からの侵攻に対して備えていたと考えられます。

周辺の関連史跡等

光瑞寺

織田信長と本願寺が11年にわたって戦った石山合戦にも参戦していたようで、当時の古文書も数多く伝わっています。

最勝寺

石山合戦や、その後の本願寺教団を支える丹波地域の重要寺院のひとつであったことが、古文書から明らかにされています。

光照寺（光照像）

永禄13年元亀元年（1570年）に川勝光照によって築かれた臨済宗の菩薩寺。木造の光照像が所蔵されています。

観光スポット！

日本の原風景「かやぶきの里」で古き良き時代の日本へタイムスリップ、「道の駅美山ふれあい広場」では自慢の美山牛乳で作られたジェラートもぜひ一度たべてほしい！

詳しくは「**なんたんSCENE**」QRコード（裏表紙）からチェック！

コラム

丹波の国には、かつてそこに住む武士達の山城が無数にあったといわれる。

梅雨明けの頃、城郭撮影行脚の道すがら、美山町の今宮城へと足を踏み入れた。

汗を滲ませながら尾根筋を歩くと、目の前には深く切り落とされた堀が姿を現す。それが自然の物か、人為的な物なのかは、一目瞭然だ。尾根を断ち切る堀は、敵の侵入を遅らせ、守り手が敵を攻撃する為の時間をつくることが可能になる。当時の武士達は、自然地形を活かしながらも、そこに手を加えて、防御機能を高めていたのである。矢のように突き刺さる蝉の声も、先人たちの知恵である見事な堀を観る喜びにより、心地よい音色に感じるのであった。

戦国期の山城は、安全に整備されているとはいえず、撮影も容易ではない。草木が繁茂する夏季は特に獣や毒虫に注意が必要となる。しかしながら、それらを度外視するほどの歴史ロマンと魅力が詰まっているのが山城であり、丹波はそれらの宝庫であることは間違いないだろう。

畠中和久

〈畠中和久　略歴〉
城郭写真家。本誌掲載の山城写真を撮影。全国の城を巡り撮影、写真展を開催。
「お城ＥＸＰＯ」にて写真講座講師、フォトコンテスト審査員としても活躍。

詳しい観光情報は

（一社）南丹市美山観光まちづくり協会／☎0771-75-1906／水曜休み

京都美山ナビ　検索

南丹市アクセスマップ

ACCESS

電車でのアクセス

- **八木城（登山口まで）**
  JR京都駅→JR八木駅（嵯峨野線快速（30分））→徒歩13分
- **宍人館（登山口まで）**
  JR京都駅→JR園部駅（嵯峨野線快速（37分））→京阪京都交通バス20分
- **島城・今宮城（登山口まで）**
  JR京都駅→JR園部駅（嵯峨野線快速（37分））→JR日吉駅（8分）→バス30分
- **塩貝城（登山口まで）**
  JR京都駅→JR園部駅（嵯峨野線快速（37分））→JR胡麻駅（14分）→徒歩15分

車でのアクセス

- **八木城（登山口まで）**
  京都縦貫千代川IC→国道9号線・一般道8分
- **宍人館（登山口まで）**
  京都縦貫園部IC→一般道11分
- **島城・今宮城（登山口まで）**
  京都縦貫園部IC→一般道30分
- **塩貝城（登山口まで）**
  京都縦貫京丹波わちIC→国道27号線・一般道30分

発行
南丹市役所　農林商工部　観光交流室
〒622-8651 京都府南丹市園部町小桜町47番地
TEL 0771-68-0050　FAX 0771-63-0654
E-MAIL kankou@city.nantan.lg.jp

最新の観光情報が満載の「なんたんSCENE」はコチラから!

なんたんSCENE　検索